

ハウス観測落蕾防げ

気象データを味方に

「温度が上がりやすいハウス内は、春先でも40度近くになることがある」（東日本の果樹産地関係者）。近年、春先や秋など季節外れの高温が増えている。その影響は、比較的環境をコントロールしやすいハウス栽培でも顕在化し始めている。



ハウス内の温度や湿度などを可視化する環境計測機



ハウスに設置されたヒートポンプ（いずれも岡山県農林水産総合センター提供）

障害で、発生すると商品価値がなくなり、経営への影響が大きい。こうした影響を軽減しようと、研究機関では、気象条件と生育との関連を分析し、対策につなげる動きがある。

岡山県農林水産総合センターは、ハウス内に設置した環境計測機を活用し、温度や湿度、積算日射量などのデータを可視化。近年増加傾向にある秋の高夜温に、低日照といった気象条件が重なるなど、落蕾が増える傾向にあると推定した。

落蕾への対策として実証試験を進めるのが、ヒートポンプを使った夜間冷房だ。落蕾が増える10度を上回らないようにハウス内の夜温を管理。発生の減少率や費用対効果を検証し、今後、普及につなげていく方針だ。ヒートポンプは加温用ですでに導入している生産者も多く、新たな活用方法

ブドウ果粒重との相関分析

として提案する。

実証に協力した、23戸でスイートピーを生産する同県倉敷市の目黒裕樹さん（43）は「夜間冷房によって、例年よりは落蕾の発生を抑えられた」という。電気代はかかるが、「費用対効果の面でもメリットの方が大きい」とみる。

◇ 果樹の一大産地・山梨県では、気象条件とブドウの生育の関係を分析する研究が進む。

県果樹試験場は、過去14年間の「シャインマスカット」「巨峰」「ピオーネ」の果粒重のデータと、同期間の気象データを照らし合わせ、果粒肥大との関連を分析。「開花期前後の気温が高く、日照時間が長いほど果粒重が大きくなる」「幼果期の気温が高く、日照時間が長いほど果粒重が小さくなる」といった相関関係を突き止めた。

今後、ハウス栽培での温度管理などに反映し、増収や品質向上のための基礎データとしての活用を目指す。